

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名： 山崎 彩 (やまさき あや)

論文「ズヴェーヴォ研究—先行する諸言説の模倣と転倒」は、当時のオーストリア領トリエステで執筆活動を展開したユダヤ・ドイツ系イタリア語作家イタロ・ズヴェーヴォ（本名エットレ・シュミッツ、1861年生-1928年歿）の創作・批評活動を「真実を露呈させる」という観点から一貫して読み解こうとした意欲的な試みである。小説を書き始める以前の評論活動（第2章）から、小説第1作（1892年刊）『ある人生』（第3章）、小説第2作（1898年刊）『セニリタ』（第4章）、小説第3作（1923年刊）が出るまでのいわゆる「沈黙期間」（第5章）をへて、第3作『ゼーノの意識』（第6章）にいたるまで、ズヴェーヴォの「真実探求」がいかに行なわれたかを、山崎論文は詳細かつ説得力ある考察によって跡づけている。とくに、小説を書き始める以前および第2作と第3作の間に介在する長い「沈黙期間」の活動に照明を当て、ズヴェーヴォの一貫した問題意識を捉えた点は積極的に評価できる。また、「真実」を覆い隠す「障害物」（先入観や偏見）となっている先行諸言説（小説、精神分析など）としてズヴェーヴォが暗に言及しているものを、山崎論文は作品ごとに明確化しようとする試み、代表作とされる『ゼーノの意識』では本来「真実を露呈させる」ための精神分析までもがそれを隠す偏見に墮しているとの創見を示している。さまざまな「先入観」や「偏見」が泡沫のごとく現われては消えてゆく状況をトリエステという特殊な文化環境に棲息する中産階級と結びつける説明や、序章において問題提起として引用されたズヴェーヴォ自身の言葉「私は一生にひとつの小説しか書かなかった」に下された解釈も十分説得的である。

ただし、ズヴェーヴォによって利用されたと思しき材源を一層博捜することが必要であろうし、材源を特定化するために概念装置として用いられている「テキスト相互性」は一層精密化することも必要である。また、散見される生硬な訳文については改善が望まれる。しかし、上に述べた山崎論文の諸長所は大きく評価できる。また、山崎論文が広く先行研究文献を視野に含めつつ、ズヴェーヴォの執筆活動全体を対象とした、わが国初の本格的研究であるという貢献は大きい。論文「ズヴェーヴォ研究—先行する諸言説の模倣と転倒」を起点とした、山崎氏の研究の今後のさらなる発展にも大いに期待が寄せられる。

よって、審査委員会は山崎論文が博士（文学）の学位に十分値するとの結論に達した。